

# こころの玉手箱 12月号



## 「母の涙」

今回の「イ〜なの日」では、自分の家族のことを思い浮かべながら考えてもらいました。生まれてから今までに間に、親や家の人をして下さったこと、逆に自分が家の人や親のためにしてあげたことを、できる限り思い出してもらい、「母の涙」を聞きました。美由紀さんとお母さんの関係は特別なものでしょうか？世の中の親というものは、時には厳しくしかったり、しかったことを後悔して涙したり、子どもの活躍を褒めた後、こっそり涙をぬぐったりすることがあるのです。美由紀さんはお母さんの行動を取り上げ、感謝のメッセージとしてこの作文を書きました。（裏面）

みなさんはどんなことを感じたり考えたりしましたか？



### ☆ 1年生 ☆

- ☆ 最後の、「お母さんに喜びの涙を流すために、目が見えなくても努力はできる」という文が印象的でした。自分の母親にもたくさんの喜びの涙を流してほしいです。そのためにたくさん努力します。
- ☆ 私は、手紙を書いたり感謝の気持ちを表したりすることが苦手なので、感謝の気持ちを伝えたことがあまりないです。だから親が裏で泣いているかなどもわかりません。でも、これからは、少しずつ伝えていけたらなと思います。
- ☆ 私は小さい頃に腕の関節が外れて、病院に行ったことがあるのですが、きっとその時、母や父、おじいちゃんおばあちゃんはこの話のお母さんと同じような気持ちだったと思います。だから心配をかけないように親に感謝して生きていきたいです。

### ☆ 2年生 ☆

- ☆ 私もよく、母に叱られます。それが私を思っている行動だというのは、頭でわかっているつもりで「うるさいなあ」と思います。でも今日の話聞いて、母が私を叱ってくれているのは、それだけで私を思ってくれているという事を改めて理解しました。私もそれに応えられるようにこれからの人生を歩んでいきたいなと思いました。
- ☆ 私の親もとても厳しく、転んだら「もっと強くなれ！」と言ってきました。その時はすごく腹が立ったのですが、「強くなれ」という言葉がなかったら、今の自分はいないと思いました。この話を読んで改めて、親に感謝したいと思います。
- ☆ 社会で生きていくには理不尽なこともたくさんあるかもしれない。そのために母は娘を強くしようとしたことがわかりました。家族の愛情表現は様々ですが、それが全て特別なことなのだとわかりました。

### ☆ 3年生 ☆

- ☆ 美由紀さんは、確かに目が見えませんが、家族であるお母さんに特別扱いされたら、プライドが傷つけられてしまっていたのではないかと思います。私がおももし目が見えなくて、であって家族から特別扱いされたらそう思うので、少し厳しくてもこのようなお母さんで良かったと思います。
- ☆ 母の偉大さや優しさを感じました。でもこの二人が特別なのではなく、普通の親子だと思いました。本当は手を貸したいけれど娘のためにきつくしかる。親はたくさんものを子に教えてくれます。だから、私も少しずつ恩返ししていきたいと思いました。
- ☆ 自分も母や父に腹が立つことはもちろんあります。でもこの話であったように、自分のために言ってくれている事は間違いありません。助けあうということだけが絆ではないとわかりました。
- ☆ 美由紀さんが目が見えないからあんな絆が生まれた訳ではないと思います。自分の子どもの可能性を信じ、時には厳しく時には優しく接していたからこそ2人は固い絆で結ばれたのだと思います。

### 保護者の皆さんへ

お子様と意見を交換して、感想などをお気軽にお寄せください。

切り取り線

保護者返信欄（お子さんを通じて担任までお渡し下さい。）

# 「母の涙」

私は生まれたときの体重が、五百グラムしかありませんでした。生まれてすぐお医者さまから説明があったそうですが、母は私のあまりの小ささに、涙があふれて先生の説明が聞き取れなかったそうです。

私の五本の指はまるでつまユウジのよう、頭の大きさは卵ぐらい、太ももは大人の小指ぐらいだったそうです。

それから七か月間、私は病院の保育器のなかで育ちました。母はそのあいだ、雨の日も雪の日も、毎日欠かさずに、私に会いにきてくれました。保育器のなかの私に声をかけてくれたり、頭をなでたりしてくれました。母が指を私の手のひらにやると、私はそれをしっかりとにぎりしめていたそうです。

母が私に会いにくる時間になると、看護師さんたちは、あわてて私の顔をきれいにふいたり、おむつをかえたり、タイヘンです。なぜなら、私の顔が少しでも汚れていようものなら、母からきつく叱られるからです。「どうして今日は顔が汚いとね。顔ぐらいきれいにふいてやらんね。忙しいとはわかるけど、それがあんたたちの仕事やろう」といっていたそうです。

生まれて五か月ぐらいになると、保育器から出て母に抱かれました。その軽さに母は、「よくここまで生きてきたね。よくがんばったね。えらかったね。」と泣いて泣いたそうです。そのころ母は、私の目のことを、お医者さまから告げられました。「美由紀ちゃんの目は、将来、ものを形としてみることはできません。」母はそのとき、ふいてもふいても涙があふれ出て、どこをどうやって家まで帰ったのか、わからなかったといいます。

でも、母はまもなく気持ちを切りかえ、「美由紀とふたりで、がんばって生きていこう」と誓ったそうです。

私が幼稚園のころ、母と二人で近くの公園にいったときのことで。遊ぶ前に母は、「ここにベンチがある」「少し歩くと看板があるから注意しなさい」などと、その公園の様子を、細かく教えてくれました。

でも、私はそこで遊んでいる途中で、その看板に頭をぶつけて、大ケガをしてしまいました。ところが、母は私を助けてはくれません。また、転んでケガをしても知らん顔です。「あんたが注意して歩かんからやろ。痛かったらもっと気をつけて遊ばんね」母の言葉はそれだけです。私が家の二階の階段から落ちて、ほんとうに痛くて、動けなくなったことがありました。そんな時でも母は上から、「あんたそんなところでなにしようかね」「階段から落ちて痛くて動けん」というと、母はたったひとつ、「ごころうさん」それだけでした。

でもあるとき、こんなできごとがありました。ある日、私が公園のブランコにのって遊んでいると、男の子が三人やってくるなり、私の顔をのぞき込んで、「こんやつは、目がみえんばい」。そのとき、母がそばにきて、「目がみえんけん、なんね。こん子はあんたたちよりよっぽどがんばりやで、思いやりがあるとよ。わかったね。」といいました。そしたら、その男の子たちが、「おばちゃん、ごめん」といいました。

私が小学校三年のころ、母と二人で補助輪をとって、自転車にのる練習をしました。私はてっきり母が、自転車の後ろの荷台をもってくれるものだと思っていました。ところが母はベンチにすわって、大声で叱るだけなのです。私は自転車ごと倒れてしまい、ひじやひざからは血がふき出しました。でも母は知らん顔です。一回倒れたら、自転車がどこにあるか、さがすのがタイヘンです。やっとのことでハンドルをつかんでも、今度は自転車をおこすのにひと苦労です。それでも母は大声でどなるばかりです。私は腹がたって、腹がたって、「なんて、冷たい母親だろう」と心の中で思いました。

しばらくの間、乗っては倒れ、乗っては倒れしているうちに、なんと自転車がスイスイ進むようになったのです。その時、母が私のそばにきて、「美由紀、よくがんばったね。なんでも根性やろう。やろうと思ったらできるやろう」といって二人で抱き合って喜びました。抱き合っているうちに、私は母に腹をたてたことなど、すっかり忘れていました。

いま、私は中学三年生になりました。今でも母には、いろいろなことを教えてもらっています。人に思いやりをもつこと、やろうと思ったらできるまでがんばること、礼儀作法をきちんとまもることなどです。私はそんな母が大好きです。

私は目が見えないので、たくさんのはことはできないかもしれませんが、でも努力することはできます。

今度は、母によるこびの涙をながしてもらいたい、と思います。それはふいてもふいてもあふれ出てくる、よろこびの涙をながしてもらいたい、よろこびとしあわせの涙です。それは私が、私の夢を実現できたときに、かなうことでしょ。